

吉田長淑『駒谷吉田方鑑』と 蘭館医レツツケとについて

津 田 進 三

越中高岡の蘭方医長崎浩齋は江戸にて大槻玄沢と杉田立卿とに学んだあと郷里に帰り診療の旁ら研究や著作につとめたが、特にその膨大な蒐書はひろく世に知られていたようである。長崎家に現存する浩齋の蔵書には「蘭東事始」をはじめ医学史や蘭学史に貴重な写本、刊本を数多くみることが出来るが、その中の一つに吉田長淑の「駒谷吉田方鑑」がある。

本書はタテ二十三センチ、ヨコ十六・五センチの和紙和綴の筆写本で、他書と合綴となっている。その題箋には「杉田吉田方函、的里亜加辨、犀角功能 四部」と二行に記されており、「杉田氏家蔵方」「駒谷吉田方鑑」「的里亜

加辨」の三部の写本と「癸未十二月四日夕到来」の大槻玄沢から浩齋に宛てた書簡一通とが合綴されている。

「駒谷吉田方鑑」は内題に「吉田成徳方鑑」とあり、わが国で最初に蘭方内科を専門に標榜して開業した吉田長淑の処方集である。本書には序文も識語もなくその成立年代を思わせるものはないが、本文は墨付十五枚で、煎剂方、丸薬部、散薬方、ワートルミッテルノ部及び製煉剂とに分類されて合計百十三方が載せられている。このうちその出典を明示したものは、多い順から内科撰要、ヘイステル、自方、印度備要方、ボイセン、レッテッキ口授方、局方、ブカン、熱病論、コンラジ、ミンニクス、ブランカルツなどであるが、このうち従来吉田長淑の著述には全くみられなかった「印度備要方」と「レッテッキ口授方」とは注目すべきものと思われる。

このうち「印度備要方」は既に昭和四十一年の日本医史学会総会にて、石川県立郷土資料館大鋸コレクシヨン所蔵本につきご報告させて頂いたが、その序文によれば文化元年諏訪俊（のちの藤井方亭）が和蘭内科書一冊を持参して師の宇田川玄真に翻訳を依頼したので、みると西医与般斯

穀多が印度に流行の疾病や薬剤などを記した袖珍備要の小冊（一七五七年刊）であったので、その益する所の大きいを思つて翻訳して翌二年一月成稿し、門人の東都安岡文龍（のち吉田長淑に師事、「門人籍」に岩村侯臣とある）に筆記せしめて諏訪俊に与えたものである。その内題には「印度備要経験方」とあり、特に熱病にくわしいようである。

一方「レッテッキ口授方」は例外的な「口授方」であり、直接蘭医による点も全く特異なものである。レッテッキとは長崎和蘭商館の外科医ヘルマヌス・レッツケ Hermann Lezke のことと思われるが、彼は寛政十年参府のとき大槻玄沢らと対談し、玄沢は「西賓対晤」に「当年初テ参府 齡二十九才 ホーゴドイツ国ノ産トイフ」と記し、彼を呼ぶのに「レッツケ」、「レッツケ」または「レッツキ」などと記している。

レッツケはつづく享和二年の参府の時も玄沢らと対談しているが、二回ともその席上「レッテキ携帯ノ医書」として外科書とともに内科書をも示している事は興味深いことである。ただ玄沢は「西賓対晤」には「通事某 眼星ヲ発

シ煩ヒシニ『レッツケ』筒ノ内ニ冰糖ヲ入レ眼中ニ吹入ル少時シミワタリ微痛シ再三ニシテ其星消セリトナリ」などと彼の治験例を示しながらも、余りに短時間の対談のためか充分意を尽せず、「医生浅学未熟ニシテ」とその不満を記している。

しかしこの享和二年の参府では、玄沢らの対談に先立つて桂川甫周は公命をうけてレッツケに顕微鏡について質問して將軍に復命していることや、更にまた紀州藩医武部子芸が文化十四年成稿した「発泡打膿考」はレッツケが吉雄権之助に伝えたヘイステルの外科書を研究したものであることなどからも、どうもレッツケが浅学であったとは思われないようである。

レッツケは寛政五年に來日し、文化二年には帰国したといわれるので、吉田長淑が直接口授をうけたとすればやはりこの二回の江戸参府の機会しか考えられないが、従来「西賓対晤」などの資料には対談者の中に吉田長淑の名はなく、現在まだ全く不明である。しかも丁度この時期の、享和二年の九月に長淑は何故か急に宇田川玄真の許に寄食し、更に十一月には掛川藩医倉持宗寿方へ養子に入ってい

るので、このこととの関連も含めて今後研究を進めたいと
思う次第である。

(静岡県静岡市)

桂川甫筑と御蔵島

新藤 恵 久

御蔵島は東京の南方海上約二百三十キロに位置し、三宅島からは東南十八キロにあり、同島の特産ツゲ材は古くから印材、櫛、そして木床義齒の床材の最高級品として重用された。

御蔵島は江戸初期より天領であり、三宅島の属島であった。さらに「諸用向の伝達が不便な為」として御蔵島の神主印は三宅島で預かり、島外との交渉はすべて三宅島の地役人によって代行された。

御蔵島民にとって唯一の財源であるツゲの輸送は三宅島の廻船によって江戸に運ばれ、代金は三宅島が勝手に管理していた。そのため三宅島の役人の私腹を肥やす不祥事が頻発し、御蔵島島民は長い間貧困にあえいでいた。三宅島